

藤子スタジオ訪問レポート

文学部卒 松本 彩（筆名：氷月 あや）

松本は2012年9月より、藤子不二雄A先生の故郷である富山県氷見市比美町商店街におけるまちづくり活動に関わりを持っています。

比美町商店街は「忍者ハットリくんに逢える街」をテーマに、藤子不二雄A先生のキャラクターを活かした商店街の活性化に取り組んでいます。

2013年5月5日、氷見市で開かれた“藤子Aワールドまつり”では、長谷悠太くん、龍田星奈さん、宮田潔志くん、奥村直くん（同好会外からの助っ人）の協力を得て、京都大学藤子不二雄同好会としてアトラクションの提供をさせていただきました。

個人的には、10月4日の“しおかぜフェスタ”にも裏方として参加し、当夜、藤子不二雄A先生の生家である光禅寺で行われた“トキワ荘14号室サミット”にも顔を出させていただきました。その折には、トキワ荘を擁する東京都豊島区椎名町の商店街の方々に、トキワ荘保存を中心とするまちおこし計画について貴重なお話をうかがうことができました。

本稿は、2013年4月23日、機会を得て東京都の藤子スタジオを訪問した際に書き留めたレポートの抜粋です。

◇◇◇ ◇◇◇ ◇◇◇

藤子不二雄A先生は、藤色の服を着ておられた。色付きのメガネに、さり気なく整えられたロマンスグレー。写真で拝見するとおりのお姿だった。

やせておいでだが、枯れた印象はない。しゃんとした足腰と明晰なお話ぶりが若々しい。

2013年4月23日。

私にとって忘れられない日となった。東京新宿の藤子スタジオにお邪魔したのだ。

本川裕次郎氏が氷見市の新しい市長に就任された。本川市長が藤子スタジオにご挨拶に上がるその場に、私も同行させてもらった。

A先生とお話しができた。

私は京都大学藤子不二雄同好会の一員として、来る5月5日に氷見市で行われる「藤子Aワールドまつり」に参加することを報告さし上げた。

私が初めて氷見市を訪れた日のことをお話した。

去年の5月4日、藤子・F・不二雄先生の故郷である高岡市を観光しながら、Twitterでつぶやいた。

「高岡なう。明日は富山市を見て、明後日は氷見市に行ってみようか」

見知らぬアカウントからリツイートされた。

「明日、氷見ではハットリくんのお祭があります。明日こそ氷見においでください」

思いがけない幸運だった。

JR氷見線、乗車した車両は水色のハットリくん仕様だった。ハットリくんの声によるアナウンスを聞き、湾に入り組んだ日本海を眺めながら、氷見へ向かった。

氷見の駅前で、商店街で、海鮮館で、ハットリくんに出会った。怪物くんに、プロゴルファー猿に、魔太郎に、たくさんのキャラクターに出会った。キャラクターに扮した氷見のまちの人々の真心に触れた。

藤子不二雄A先生の世界を感じた。先生が氷見のまちでどれほど愛されているかを知った。小さなまちの元気な姿に、訪れた私も元気をもらった。

氷見のまちを題材に小説を書きたい。その望みをいただいたのは、作家としてのサガだ。何度も氷見へ行った。行くたびに氷見を好きになった。好きがこうじて、今度は5月5日の藤子Aワールドまつりにイベント提供側として参加することになった。

「京大藤子不二雄同好会は、僭越ながら『まんが道』をテーマにした人間すごろくを企画し、私たちメンバーは満賀道雄と才野茂のコスプレをさせていただきます」

ほんの短い間お話ししただけでも、私は嬉しかった。

本川市長は氷見市の近況を報告し、抱負を語った。

昨年、産業経済省の中小企業庁長官が氷見市を訪問し、藤子A先生のキャラクターを活かした地域おこしを高く評価した。

氷見市はただ藤子Aキャラクターの像を設置したのではない、A先生の作品の世界観を理解しようと努める姿勢が素晴らしい、と。

A先生の作品世界とは、つまり、人間と人間でない存在、あるいは、日常的な人間と日常から乖離した人間が、隣り合って暮らす世界だ。氷見市の懐の深さは、まさにA先生の作品世界と通ずるものがある。

A 先生はおっしゃった。

今、全国の地方都市は疲弊している。商店街を歩けば、下ろされたきりのシャッターが目にとまる。

氷見に活気があるのはいいことだ。お隣の高岡市よりも元気なんじゃないかと思う。その元気を全国の地方都市にも広げていけたらよいのに。

藤子スタジオの方のお話によると、東京でも氷見の里の恵みに出会える場所があるという。

神奈川県にある黒川の JA は JA 氷見市と提携している。氷見産の米はいつも店頭で並んでいるし、定期的に氷見の食品のフェアが行われている。ちょうど今日も氷見牛のコロッケが販売されているのを目撃したところだ。

4月16日付の日本経済新聞の文化欄で初めて知ったのだが、A 先生はこの3月に『愛、知りし頃…』を完結させられた後、お体を壊されたという。

A 先生ご本人が「もう大丈夫」と保証してくださった。ICU に入られていた時間は長かったものの、回復は非常に早かったそうだ。

ゴルフのおかげだろう、と A 先生はおっしゃった。数十年にわたって、週に2回か3回、カートのないゴルフ場に通っておられるのだ。1ラウンドで10キロメートル近くも歩かれるという。鍛えられたお体の強さ、特に足腰の強さには、敬服の限りだ。

本川氏と林氏の報告。

5月のAワールドまつりと秋の商店街まつりでは、A 先生の作品をモチーフにしたイベントを開催している。

光禅寺の石像をモデルに紙粘土工作をする「忍法分身の術」。

光禅寺の境内で猿の得意技に挑戦する「旗包みチャレンジ」。

同じく境内で喪黒福造よろしくポーズを決めて大声で叫ぶ「ドーンドン大会」。

商店街をめぐるスタンプラリーやクイズ大会。

富山大学美術部と協力した「あしあとアート」。

商店街じゅうのお店が百円商品を提供する「百縁笑店街」。

地元に住むお年寄りに集まっていただき、ニーズを調査する試みも行っている。

また、商店街のうち4つの店舗において、1坪の場所をショップ・イン・ショップ「藤

子Aミニワールド」とし、氷見市で製作している藤子Aキャラクター商品を販売している。
現時点で、すでにコンテンツは出そろっている。全国へ発信し、氷見の様子を知ってもらい、氷見へ観光に訪れてもらいたい。そんな時期に来ている。

A先生のご報告。

北国新聞と富山新聞が共に創刊120周年を迎える記念として、北陸（富山県と石川県）の食をテーマにしたエッセー本を合同で出版する。A先生もそこへ寄稿された。

お寺で生まれ、幼少期を過ごされたA先生は、精進料理を好まれる体質だ。「昆布の味で育った」とA先生はおっしゃった。高岡市の塩谷昆布店の特上黒とろろがお好きで、富山に帰省される際には必ずお求めになる、という話は、ファンの間でも有名だ。

A先生の好物は、ほかに海津屋のうどんがある。実写版の怪物くんを演じた嵐の大野智氏が撮影で氷見を訪れた際にも、一緒にうどんを召し上がっていた。

高岡市の大杉堂のおやきも大変好まれていた。しかし、残念なことに2013年2月、大杉堂は閉店している。

A先生は氷見の「はべん」もお好きなのだが、「ああ、エッセーに書くのを忘れてしまった」と笑っておられた。

A先生の思い出話。

富山新聞といえば、A先生は高校を卒業された後の2年間、富山新聞社で働いておられた。その2年間は自分の人生にとって大きな要素となっている、とA先生はおっしゃった。

「大きなお寺のお坊ちゃんだった私は、学校では体の大きな漁師の子どもたちに、小柄な体格や体操が苦手なことをからかわれてばかりだった。担任の先生から「なんだ、起立していたのか。小さいから座ったままに見えた」と、ひどい冗談を言われたこともある。

いやいやながら学校に通っていた。現代だったら不登校になっていたところだ。

人見知りで、赤面恐怖症だった。人前に立たされると、顔が真っ赤になってしまう。おかげで電熱器というあだ名を付けられた。

しかし、新聞社に入ってから、記事を書くためのインタビューで鍛えられた。

最初は広告の絵を描く部署に配属された。しかし、説得力がない絵だというクレームが入り、1週間で別の部署に移ることとなった。私の描く絵がまんが的だったからだ。

政治部のイラストを描いていた。当時の首相といえば吉田茂。激動していた時代の日本の政治家を描いていた。

そのうち、社会部から、ある企画を任された。『裏から見れば』という連載だ。身近な物

事の裏事情をレポートする、という企画で、最初の仕事は移動動物園の舞台裏を記事にすることだった。

しかし、移動動物園のスタッフといえば、少し怖いタイプの人々の集まりだった。私は怖じ気づき、誰のインタビューもできないまま、1日じゅう動物園の中をうろうろしていた。

人間が怖くて話を聞けずじまいになってしまったので、仕方ないから動物たちにインタビューしたことにして『ライオンはこう言った』『キリンはこう言った』なんていう記事を新聞に掲載した。これがウケた。

二度目の仕事は郵便局の舞台裏だった。インタビューする側がいじけていたって仕方がない。私は次第にインタビューの仕事に慣れた。人間のおもしろみに気付くようになった」

A先生の思い。

「幼いころから今まで変わらず好きな景色がある。氷見の湾に浮かぶ唐島と、その背景に見える立山連峰。

その景色を眺めていると、気持ちが広がる。くさくさした感情が吹っ飛んでいく」



A先生の飾らないお人柄が好きです(^^)

松本はこれからも氷見にしばしば通います。

ブックログのパブー 氷月あやのページ

<http://p.booklog.jp/users/iycrescent1251>

未完成ながら、氷見市のまちづくりをテーマにした小説を掲載しています